チームの年齢構成の違いが地域スポーツクラブへの参加に及ぼす影響に関する一考察

李　真・仲野隆士・金子守男・守能信次・江橋慎四郎

THE STUDY OF THE INFLUENCE ON THE PARTICIPATION IN TEAMS OF LOCAL SPORTS CLUBS ACCORDING TO DIFFERENCES IN AGE GROUP CONSTRUCTION

Zhen Li・Takasi Nakano・Morio Kaneko
Shinzi Morino・Shinshiro Ebashi

ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate the effect on the frequency of participation to activities of local sports clubs due to the differences of age-group construction of the team members.

The results of the study were summarized as follows:

1. The study showed that the twenties-aged group presented a lower rating on joining local sports clubs and lower frequency in participation of the club activities. There are probably some other reasons which would lead to this result.

The following three findings are obtained in this study:

(i) The community indentification of the twenties-aged group is lower than the middle-aged and elderly-aged groups.

(ii) The team identification of the twenties-aged group is lower than the middle-aged and elderly-aged grouos.

(iii) As observed from another aspect, the varied interests in different kinds of sports and other leisure activities occupied the leisure time of the twenties-aged group resulting in a lower proportion of time given to joining local sports clubs.

2. On the other hand, the local club teams of T-City consisted of two types: one is mostly formed by the middle-aged members, and the other mostly by people in their early twenties. The latter had the characteristics of achieving higher performance technology and being more challengable. Members of those teams presented higher frequency in participating on local club activities.

研究の目的

市民の健康に対する関心の高まりや生活水準の向上，さらに自由時間の増大などが相まって，体育・スポーツを愛好し，進んでこれを実践しようとする人々が年々増加している。それゆえに，今日，各市町村におけるスポーツ振興の重要施策の１つに，スポーツクラブの育成という問題が浮び上がってきた。社会学辞典の「クラブ」という概念に基づく，スポーツクラブとは，

楽しみや健康のためにスポーツをすることへの興味，欲求をもった人たちによってつくられた開放的な機能集団であり，それが成立発展していくためには，施設、指導者，プログラムといった諸条件が整わなければならない。

従来，スポーツクラブの研究は学校の運動部集団を取り上げたものが多く，地域スポーツにおける研究は，近年，多く行われるようになり，社会体育の研究領域における主要な研究テーマとなっていることがうかがえる。そこで，スポーツクラブの育成に関して何らかの方途を見出そうとすれば，クラブの活動を規定する要因についての研究はその裏付けとして必要であろう。この点に関しての研究は，これまで幾つか行われてきた。例えば，細川ら[1]は社会人のスポーツクラブの存立要因について，また山本ら[2]はクラブの日常的活動に対して会員の参加状況とそれを規定する要因について分析した。中島ら[3]は，クラブの存続と変容に関連する要因について検討した。川西・前川[4]は，クラブの存続年数と他の要因との関係を報告した。これらの研究は実態調査のレベルでスポーツクラブの参加性や存続性を規定する要因を明らかにしている。会員の参加性やクラブの存続性の問題も，クラブ研究の一側面であり，クラブ育成上意義ある知見を提供することができよう。

地域スポーツは，競技スポーツと性格を異にする点がある。その活動目的は，主に健康・体力の保持・増進，地域住民の交流を深めること，あるいはゲームを楽しむことに置かれている。また，スポーツ活動だけではなく，社会奉仕活動や青少年育成のための教育活動等のコミュニティ活動にも協力している。つまり，地域スポーツ活動にコミュニティ形成の期待がかけられているということから地域スポーツ活動には，性別、年齢あるいは職業などの区別がなく，様々な人々が参加しているのが現状である。

地域スポーツクラブは一種の社会集団であり，その参加者の年齢層の違いによって，スポーツに対する関心，意見，とらえ方などが異なることが考えられる。そこで，本研究は，愛知県下T市の地域スポーツ活動について，その参加者の年齢に着目し，年齢のちがいによって，スポーツのとらえ方，さらには地域に対する意識などがどう異なるかを明らかにすることによって，地域スポーツクラブの参加者の年齢構成が地域スポーツ活動への参加にどのような影響を及ぼすかを検討することを目的とする。

研究の方法

1．対象の選択

T市は人口約7万強の臨海工業を中心とした都市で，愛知県知多半島の北西部に位置している。臨海工業地帯の埋め立て造成工事の契機で，大企業が相次いで進出し，工業化，都市化の進行，さらに急速な人口増加により地域構造の大きな変化をもたらした。

T市は昭和48年度の「T市における体育・スポーツについての基本的な方策について」の答申以来，社会体育の多岐にわたる諸事業を開催している。この間，昭和50—51年度には，文部省の「地域住民スポーツ活動の振興都市」に指定され，さらに，昭和52—54年度に総理府の「体力づくりモデル市」に指定されるなどして，昭和55年には，「全国体力づくり国民会議議長賞」を授賞した。また最近，本調査と同年度昭和62年「体力つくり優秀組織表彰総務庁長官賞」を授賞した。

T市の10地区には十数種目，137クラブ[5]が結成されている。そのなかには，成人クラブが102，少年少女スポーツクラブが35存在している。これらのクラブの構成は，いずれも町内単位や小学校区単位という単位行政区域を基盤としており，居住地を中心とした地域連帯づくりに大きな役割を果している。とくに男子を主導としたソフトボールクラブは10地区に58あり，全部の地域スポーツクラブの半数を占めている。他は，女子を主導とした16のバレーボールクラブがあり，25のバドミントン，卓球，テニスクラブなどがある。それらのチームの特徴にごく近接した空間に居住する既婚者どうしで結成されてきた近隣集団であるということがあげられる。こうした地域スポーツクラブが全市

域につくられるようになった理由の一つとして，昭和62年度における104の地区スポーツ大会が開催されていることにあると思われる。

2．調査の方法

以上の理由から，本研究では，T市の10地区に存在する102の成人スポーツクラブを調査対象に選定した。調査に関しては，地区スポーツクラブの集団特性を把握するためにクラブの責任者に，そして参加者の特性を把握するために構成員にアンケート調査を実施した。尚，調査票の配布，回収は次の手順で行った。

市教育委員会スポーツ課⇄地区スポーツ委員会
⇅
地区スポーツクラブ員⇄地区スポーツクラブ責任者

調査期間は昭和62年11月から一ケ月間とした。有効回収数は1,829，有効回収率は79.8%であった。

3．研究の方法

T市の地域スポーツ活動の実態を把握するため，1）参加者の年齢とスポーツ活動への参加頻度，技術・勝利志向との関係，2）スポーツ活動への参加頻度と技術・勝利志向との関係，3）参加者の年齢と地域帰属意識及びチーム帰属意識との関係，4）スポーツ活動への参加頻度と地域帰属意識及びチーム帰属意識との関係をクロス集計によって，検討した。尚，個々のクロス集計の有意性を，カイ自乗検定により確認した。さらに，T市の地域スポーツ活動の実態と総理府の国勢調査による余暇活動の実態及びT市教育委員会のアンケート調査による余暇活動の実態を比較・検討することにより，今後の地域スポーツ活動発展のための課題提起を試みた。また，データのなかにN・Aの部分は極く少数であったため，下記のデータのなかには含めなかった。なお，分析にあたっての計算処理におけるプログラムは，SPSSを用いて実施した。

表1　年齢とスポーツ参加頻度

	20代	30代	40代	50～	全体
1．ほとんど参加する	52.9	58.7	62.6	66.4	60.7
2．ときどき参加する	25.7	21.8	24.3	19.8	23.2
3．あまり参加しない	12.4	15.4	8.7	9.2	11.8
計　100 %＝（人）	210	707	781	131	1829

P＜0.1 %

結果と考察

T市地域スポーツクラブの年齢構成については，全体のサンプルをみた場合，20歳代は210名，30歳代は707名，40歳代は781名，50歳以上は131名となっている。このことから，20歳代と50歳以上のクラブ成員が少ないことがわかる。

クロス集計を試みたところ，次のような傾向が認められた。つまり，年齢に着目した場合，年齢が低ければ低いほど，スポーツへの参加頻度が低いという傾向にある（表1）。また，「技術向上」，「勝ちたい」という技術・勝利志向型の動機をみたところ，年齢が低ければ低いほど，この動機が強い（表2，表3）。但し，この動機が強い人は，スポーツへの参加頻度が高いという傾向である（表4，表5）。これを図1で表わしてみた。すなわち，全体的にみると，若い年齢層の人々がスポーツへの参加頻度が比較的に低いけれども，一方，若い年齢層の中で，その参加頻度の高い人にもいるという事実である。

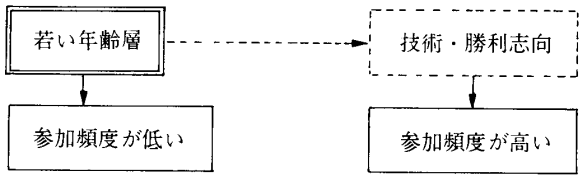

図1　若い年齢層と地域スポーツ参加との関係Ⅰ

表2　年齢と技術志向

問　技術を向上させるためスポーツ活動をする

	20代	30代	40代	50～	全体
1．はい	56.7	47.9	36.2	33.6	42.9
2．いいえ	29.5	39.3	52.8	57.3	45.2
3．わからない	13.9	12.7	11.0	9.1	11.8
計　100%（人）	210	707	781	131	1829

P＜0.1%

表3　年齢と勝利志向

問　試合に出て勝ちたいからスポーツを活動をする

	20代	30代	40代	50～	全体
1．はい	47.6	33.5	26.0	24.4	31.3
2．いいえ	35.7	54.2	64.1	70.2	57.5
3．わからない	16.7	12.3	9.8	5.4	11.2
計　100%(人)	210	707	781	131	1829

$p<0.1\%$

そのため，どのような若い人がその参加頻度は低いか，どのような人がその参加頻度は高いか。次に，図1の原因について考察を深めたい。

まず，総理府統計局「社会生活基本調査」(1981)の資料によると(表6)，スポーツをする人は，20歳代の人々が約70.7%と圧倒的に多い。次に30歳代，40歳代，50歳代，そして60歳以上の順である。学習活動（余暇活動）については，スポーツをすることと同じのような傾向が認められた。社会奉仕活動については，20歳代は約20%を占め，一番低く，30歳代になると，高くなるようという傾向がある。このことは，若ければ若いほど，よくスポーツをしたり，

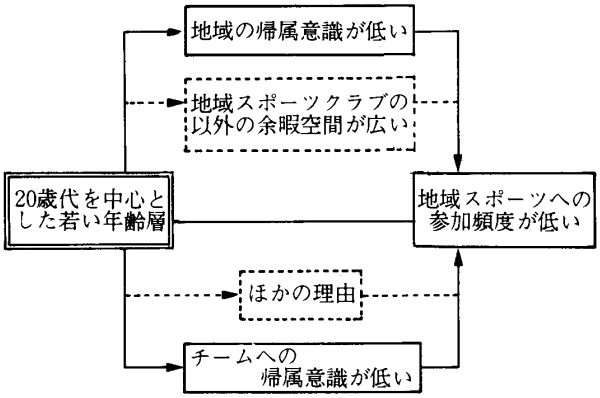

図2　若い年齢層と地域スポーツ参加との関係Ⅱ

学習活動に参加したりしていることを示している。しかし，社会奉仕活動に対しては協力頻度が低いということが明かとなった。

また，本調査では，地域への帰属意識を分析するために5つの質問(表7参照)を設定した。また，チームへの帰属意識を分析するために5つの質問（表8参照）をそれぞれ設定した。地域への帰属意識については，20歳代が約62%，30歳代が約71.8%，40歳代が約76.9%となっており，そして，50歳以上は約87%とかなり高い。全体的にいえば，この意識をもっているメンバー達は，全体の6割以上になっており，かなり高く，中高年者は若い人々より高いという傾向が認められた。チームへの帰属意識については，肯定的に答えているのは，20歳代が約48.

表4　スポーツ参加頻度と技術志向

問　技術を向上させるためスポーツ活動をする

	ほとんど参加	ときどき参加	あまり参加しない	N
1．はい	66.6	18.7	10.3	785
2．いいえ	56.8	27.2	12.7	827
3．わからない	54.9	25.7	13.5	171
全　体	60.7	23.3	11.8	1829

$p<0.1\%$

表5　スポーツ参加頻度と勝利志向

問　試合に出て勝ちたいからスポーツ活動をする

	ほとんど参加	ときどき参加	あまり参加しない	N
1．はい	72.7	15.9	7.7	572
2．いいえ	54.7	27.4	14.0	1051
3．わからない	58.1	25.0	11.3	160
全　体	61.8	22.7	11.0	1829

$p<0.1\%$

表6　年齢，学習活動・社会奉仕活動・スポーツ行動者数と行動者率

（千人）%

カテゴリー／年齢	学習活動(学業以外)		社会奉仕活動		スポーツ活動	
	行動者数	行動者率	行動者数	行動者率	行動者数	行動者率
20～29歳	6795	57.3	2387	20.0	8376	70.7
30～39歳	7778	50.3	4452	28.8	9522	61.5
40～49歳	6160	44.6	4141	30.0	6163	44.6
50～59歳	4048	40.4	3032	30.3	2623	26.2
60歳以上	1952	31.6	1964	32.4	1064	17.5

＊総理府統計局「社会生活基本調査」(1981年)による

6%，30歳代がやや高く，約50.7%を占め，40歳代が約59.4%，そして50歳以上が約69%となっている。否定的に答えているのは，20歳代が約31%，30歳以上の人々が約18%となっている，これは，若い人々はチームへの帰属意識が中高年の人々より低いということを示した結果であろう。但し，「わからない」の覧をみたところ，若い年齢層の答えた割合がかなり高く，おそらく，若い年齢層の人は無関心が多いのではないかと思われる。そして，地域への帰属意識とチームへの帰属意識からスポーツへの参加頻度をみてみよう。地域への帰属意識からスポーツへの参加頻度をみると，割と地域への帰属意識の低い人がその参加頻度は低いほうである(表9)。また，チームへの帰属意識からスポーツへの参加頻度をみると，チームへの帰属意識の低い人がその参加頻度は相対的に低いほうであるとみられた(表10)。したがって，本調査の対象の中で，地域への帰属意識とチームへの帰属意識においては，若い年齢層が中高年齢層より低く，且つ，これも若い年齢層の人がチームへの参加頻度は低い理由の一つのではないかと考えられる。

また，T市教育委員会が昭和60年度に行った「市民のスポーツに関する調査」(表11)をみてみよう。「運動・スポーツを行った」のところをみた場合，若い人々は中高年の人々より運動・スポーツをよく行っており，上記の総理府の「社会生活基本調査」の結果と同じような傾向にあ

表7　年齢構成と地域への帰属意識

4段階評価	20代	30代	40代	50～	全体
＋＋	30.5	36.1	44.9	57.5	40.7
＋	31.5	35.7	32.0	29.5	33.2
－	27.9	22.8	17.9	8.9	20.3
－－	5.2	2.8	1.8	1.0	2.5
計100%＝(人)	210	707	781	131	1829

＊地域への帰属意識については5つの質問がある。それを総合したものである[11]。
＊数量化の技術で4段階評価法を行う。「＋＋」＝「そう思う」，「＋」＝「ややそう思う」，「－」＝「あまりそう思わない」，「－－」＝「全くそう思わない」

表8　年齢構成とチームへの帰属意識

	20代	30代	40代	50～	全体
1．帰属意識が高い	48.6	50.7	59.4	68.9	55.5
2．帰属意識が低い	31.3	18.0	18.1	17.4	17.9
3．無回答・わからない	31.7	29.8	20.6	11.8	24.8
計　100%＝(人)	210	707	781	131	1829

$p<0.1\%$
＊チームへの帰属意識については，5つの質問がある。それを総合したものである[12]。

表9　地域への帰属意識とスポーツ参加頻度

参加頻度＼評価法	＋＋	＋	－	－－	全体
ほとんど参加する	50.2	30.8	16.6	1.7	30.6
ときどき参加する	43.9	32.5	17.2	2.5	23.2
あまり参加しない	39.8	28.9	20.5	3.3	5.9
計　100%＝(人)	1114	450	182	22	1829

＊地域への帰属意識については5つ質問がある。それを総合したものである[11]。
＊数量化の技術で4段階評価法を行う。「＋＋」＝「そう思う」，「＋」＝「ややそう思う」，「－」＝「あまりそう思わない」，「－－」＝「全くそう思わない」

表10　チームへの帰属意識とスポーツ参加頻度

参加頻度＼意識	高い帰属意識	低い帰属意識	無回答など	全体
ほとんど参加する	63.8	17.2	19.0	30.4
ときどき参加する	58.9	25.7	15.4	23.2
あまり参加しない	50.1	33.2	16.7	5.9
計　100%＝(人)	1194	388	220	1829

＊チームの帰属意識については5つの質問がある。それを総合したものである[12]。

表11　T市教育委員会昭和60年度の市民（10学区）のスポーツに関するアンケート調査結果（各質問に対する行動者率）

性別	年齢%＼項目	運動・スポーツを行った率	運動・スポーツを友人・知人と行う率	スポーツを地域の人々と行った率	娯楽なように自由時間を過ごした率	友人交際をなどうすに自由時間を過ごした率	運動・スポーツを自由時間をするように過ごす率
男	20代	84.8	61.2	9.6	53.5	34.5	28.7
	30代	77.3	32.0	19.9	45.0	5.6	23.4
	40代	71.1	26.4	20.8	34.9	6.4	24.7
	50代	45.7	25.5	15.0	25.9	5.4	14.1
女	20代	58.2	63.7	9.0	54.5	38.1	13.4
	30代	49.6	30.0	31.9	36.8	12.1	9.9
	40代	33.6	33.1	27.2	23.2	19.5	2.2
	50代	14.7	20.0	16.7	20.7	10.3	0.9

る。さらに,「運動・スポーツを友人・知人と行った」,「友人交際のように自由時間を過ごした」,「運動・スポーツをするように自由時間を過ごした」,「娯楽のように自由時間を過ごした」4つの欄をみたところ，若い人々のほうが中高年の人々よりよく友人と一緒に運動・スポーツをしたり，余暇時間を過ごしたりしている。また娯楽のように，運動・スポーツをするように余暇時間を過ごすのは，やはり若い人々のほうが中高年の人々より高い傾向にある。しかしながら,「運動・スポーツを地域の人々と行った」のところをみた場合，20歳代の人々は男女とも極めて低い傾向にあり，30歳代になると，多くなるような傾向が認められた。このことを一口に言えば，若い人々はよく友人と運動・スポーツを行ったり，娯楽をしたりする。ただ，地域の人々とはあまり行っていないということを示している。

この点に関連するものとしては,総理府の「体力・スポーツに関する世論調査」(1985年)[6] の中に,「この1年間に行った運動・スポーツの有無とその種別」における表をみると，運動・スポーツを行った20歳以上の対象の中で若ければ若いほど，よく行っているし，スポーツの各種別に対しては，年齢の差があまりみられないが,「軽い運動・野外・競技的スポーツの全部」に対しては，20代の人が圧倒的に多いということである。これが，若い人は行ったスポーツの種別が中高年の人よりも多いという傾向が指摘されている。また，当該の調査[7] では,「クラブ・同好会への加入率と加入意向」や「職場のスポーツ行事への参加と参加意向」や「スポーツ教室への参加と参加意向」は，やはり若い年齢層の人々が積極的に実施しているものと示唆されている。しかし,「地域のスポーツ行事への参加と参加意向」は，かえって，20代の人が30,40代の人々よりも低いという事実である。

このことは，地域スポーツはスポーツ活動だけではなく，社会奉仕活動，地域行事といったコミュニティ活動もあるという特徴がある。こういう活動は，若い人が敬遠しがちであり，さらに若い人は地域やチームへの帰属意識が中高年の人より低いので，地域スポーツへの参加頻度が低いのではないかと考えられる。また，若い人はスポーツや余暇といった活動の範囲が広く，特定の地域スポーツクラブの以外の余暇時間を占めているのではないか。そのため，地域スポーツクラブに加入する若い人が少なく，参加頻度も低いものと思われる。これらの分析結果では図2で表われるであろう。

次に，チームの年齢別の特徴について着目したい（表12)，Aの種目[8] については，一チームの平均人数は20歳代が約2.2名，30歳代が約7.9名，40歳代が約10.3名，そして50歳以上が約2.6名となっており，Bの種目[9] は20歳代が約1.7名，30歳代が約8.2名，40歳代が約5.5名，50歳以上が約0.6名となっており，Cの種目[10] は20歳代と50歳以上が同じくらいで約2名，30歳代と40歳代が同じくらいで約12名となっている。20歳代と50歳以上の参加者は少ない，とくにB，Cの種目がAの種目より少ない。さらに分散と標準偏差（S・D）を

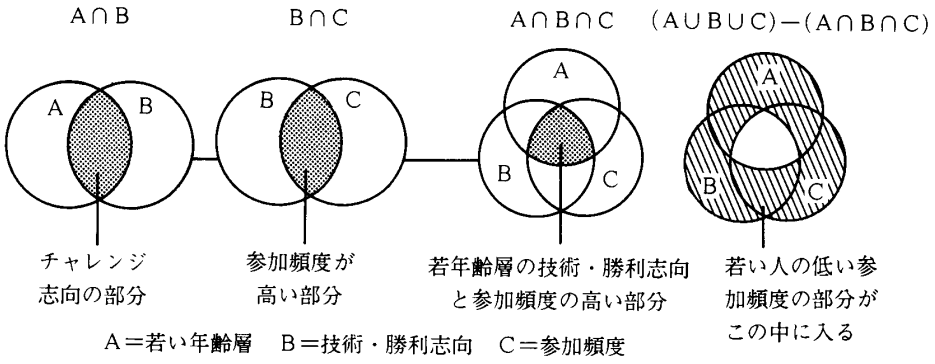

図3　若い年齢層と地域スポーツ参加との関係Ⅲ

みた場合，チームによって，チームの各年齢層の平均人数からかなり散らばっているものと見られた。とくにB，Cの種目は著しい傾向になっている。そして，各チームの年齢構成は具体的どのように散らばっているのかをみるために一チーム，一チームの年齢別構成をみた（表13）。Aの種目については，「若年層型チーム」は約26%，「中高年型チーム」は約31%となっている。Bの種目の場合は，「若年層型チーム」は約38%とかなり多く，「中高年型チーム」は約19%となっている。Cの種目は，「若年層型チーム」は約28%，「中高年型チーム」は約24%となっている。全体的にみると，約56%のチームが「若年層型チーム」に，あるいは「中高年型チーム」に集中しているという結果が得られた。これらのことから，T市の地域スポーツ参加者は30，40歳代に集中し，若い人から中高年の人までがバランス良く加入しているチームは極めて少ないことがわかる。つまり，あるチームは20，30歳代に集中しているし，あるチームは40歳以上に集まっているといった傾向である。

このことは，若い年齢層は競技スポーツ志向が強いので，あまり平均年齢の高いチームに加入したがらないを示唆しているものと考えられる。また，別の角度からこのことを捉えるならば，チームにいる継続年数の長い人を優先に試

表12　知多市地域スポーツクラブの年齢構成I

	A種目　N＝58				B種目　N＝16				C種目　N＝25			
	20代	30代	40代	50～	20代	30代	40代	50～	20代	30代	40代	50～
(人数)計	129	461	598	153	27	131	88	9	49	313	300	48
平均人数	2.2	7.9	10.3	2.6	1.7	8.2	5.5	0.6	2.0	12.5	12.0	1.9
分散	2.2	23.9	13.8	9.0	0.6	37.8	19.3	0.3	2.8	135.0	30.8	5.2
S．D	1.5	4.9	3.7	3.0	0.8	6.1	4.4	0.6	1.7	11.6	5.5	2.3
構成比率	9.6	34.4	44.6	11.4	10.6	51.4	34.5	3.5	6.9	44.1	42.3	6.8

＊チーム団体の調査による

表13　知多市地域スポーツクラブの年齢構成II

スポーツ種目 / チームの年齢型		A種目＝58		B種目＝16		C種目＝25		全体＝99	
		チーム数	構成比率	チーム数	構成比率	チーム数	構成比率	チーム数	構成比率
若年齢型チーム	成員が70%以上の数	15	25.9	6	37.5	7	28.0	28	28.3
	成員が80%以上の数	6	10.3	4	25.0	4	16.0	14	14.1
	成員が90%以上の数	2	3.4	3	18.8	1	4.0	6	6.1
	成員が100%の数	2	3.4	2	12.5	0	0	4	4.0
中高年型チーム	成員が70%以上の数	18	31.0	3	18.8	6	24.0	27	27.3
	成員が80%以上の数	8	13.8	1	6.3	4	16.0	13	13.1
	成員が90%以上の数	3	5.2	0	0	1	4.0	3	3.0
	成員が100%以上の数	2	3.4	0	0	0	0	2	2.0
	諸年層型(各型29～69%)	25	43.1	7	43.8	12	48.0	44	44.4

＊若年齢型チームは20代，30代に集中している。中高年型チームは40代，50代以上に集中している。各チームの70%以上の人数が20，30代にはいたら若年齢型チームに属し，40，50代にはいたら中高年型チームに属する。

＊諸年層型チームはチーム年齢の構成比率(表12)に基づいて，20，30代と40，50代が別々約50%を占め，20，30代にしても，40，50代にしても，30%～70%の範囲以内ならば，諸年齢層型であると考えている。

資料：チーム責任者と個人の地域スポーツ活動に対する意見
（自由記入方式による回答）

a．若い部員の入部がほとんどなく，部員全体が高齢化にきており，勝とうとする意欲が薄れてきておる。今後の目標設定をしていなければならないと考慮する。
b．創部以来，10数年経過をしており，年齢構成が高くなってきているため，若い人を多くし，年齢的なバランスを取れるように計りたい，そのようにしなければ，年齢的な劣えで退部する人も徐徐に出てきており，部の活動が縮小の方向になっていくと思われる。これは，市全体的に見ても同じ傾向にあると思われる。
c．現在の私達のチームは勝敗にこだわりすぎるので，人員がだんだん減る。私は，上手な人と下手な人が一緒にスポーツを楽しみ一人でも多くの人が参加することがよいと思う。
d．あまりにも勝負にこだわりすぎると，楽しさがなくなる。しかし，試合となるとやはり勝ちたい。楽しむ為のスポーツなのか……？　勝つ為のスポーツなのか……？　よく課題になる難しい疑問である。
e．私はT市八小ママのチームに来たばかりですが，試合には出たいが出してもらえない人が多いです。少し誰でも出場出来るように成ると良いと思います。
f．学区内のスポーツ活動に参加する顔ぶれが同じメンバーになりやすいように思います。若い世代は子育てで手が離れなく，手がかからなくなると，働きに出るためメンバーは減少の傾向にあります。

合させるという年功序列意識は多少あるので，若い人が不満な気持ちを持ち，加入率が低くなっていると見ることができよう（資料e参照）。そのほか，女性に関して述べれば，若い新婚女性は小さい子供の育児や家事に束縛され，チームのメンバー構成における若い女性の占める割合は減少の傾向（資料f参照）にあるといえる。しかし，若い年齢層に集中しているチームは，「技術向上」や「勝ちたい」といった技術・勝利志向のチームが多いので，参加頻度が高いのではないか(図1)。このことが，若い人々は一般的には地域スポーツへの参加頻度が低いけれども，技術を向上させたい，チャレンジしたい若い人々に限定していえば，参加頻度が高いという結果になっているものと思われる。

要　　約

本研究では，20歳代の人は地域スポーツクラブへの加入率が低く，参加頻度も低い，ということが明らかにされた。次にこうした傾向をもたらす原因を，調査結果に基づき考察を進めた。以下に示す3つが，その考察の結果である。

1．年齢が低ければ低いほど，地域に対する共通の愛着感，統一感，永住意識などといった帰属意識が低くなる。

2．さらに，年齢が低ければ低いほど，チームへの帰属意識も低くなる。

3．ほかの角度からみると，ニュースポーツ，あるいは流行のスポーツや趣味・娯楽といった余暇活動を行う人は中高年の人よりも20代の人が多い。このことから，20代の人は活動範囲が広く，特定の地域スポーツクラブの以外の余暇空間を占めているのではないかと考えられる（図2参照）。

また，T市では，若い人は技術・勝利志向のほうが強いこと，そして技術・勝利志向の人は参加頻度が高いということは，「若い年齢層」（A）と「技術・勝利志向」（B）と「参加頻度」（C）の積事象，すなわち，$A \cap B \cap C$の式で表すことができる。そして，若い人は地域スポーツへの参加頻度が低いということは，$(A \cup B \cup C) - (A \cap B \cap C)$の式で示され，しかも，そのうちの一部分であると考えられる（図3）。

T市の地域スポーツ活動の現状は，若い人たちは中高年の人々より，よくスポーツ活動を行うが，地域スポーツクラブに加入する人が少なく，チームのスポーツ活動への参加頻度が低くなっているという傾向にあるのではなかろう

か。そして，T市の地域スポーツクラブの個々のチームは年齢構成の点から次にのべるように，大きく二つに分かれている。一つは，若い層のチームで，技術・勝利志向が強いというチームであり，もう一つは，中高年層のチームで，ゲームを楽しむ，あるいは健康のためにスポーツをするといった志向のチームの二つである。

このことは，参加者間の親睦や交流を図ることにチーム活動の目的を置くと，地域スポーツ活動への若者の参加が減り，反対に競技パフォーマンス・レベルの向上にチーム活動の目的を置くと，中高年者の参加が減っていくという傾向を示唆している。自由回答(資料a～d)は，こうした傾向を述べた典型例であるが，特に，T市ではチーム構成員が中・高年齢層に傾斜しつつあることを反映している。こうしたことから，より多くの若者を地域スポーツ活動へ参与させていくため，そして地域スポーツ活動に参加する人々の活動欲求を充足させていくために，クラブの組織構成や運営方法，あるいは施設管理にまで至るソフト・ハード面をいかして充実させ，発揮させていくか，ということが今後の地域スポーツに課せられた主要な課題であると考えられる。

注・文献

（1）細川磐ら「社会人のスポーツクラブの存立要因に関する分析的研究」(昭和50年　大阪体育大学紀要　p.43)

（2）山本秀人ら「スポーツクラブの参加性を規定する要因に関する研究」(1980年中京体育学研究　第20巻　第2・3合併号　p.81～91)

（3）中島豊雄「地域スポーツ集団の存続と変容」(1980年　総合保健体育科学、第3巻　1号　p.81～97)

（4）川西正志，前川峯雄「生涯スポーツ的見地から見たスポーツクラブの存続性に関する研究」(1980年　中京体育学研究，第20巻　第2・3合併号　p.69～80)

（5）T市教育委員会のスポーツ課の下は，「体育協会」,「体育指導委員会」,「少年・少女スポーツ団体」，と「ママさんスポーツクラブ運営委員会」がある。市体育指導委員会の下は，10の「地区スポーツ委員会」が設置している。その137のスポーツクラブは，10地区のスポーツ団体数目であり，全市のスポーツ団体数目ではない。

（6）内閣総理大臣官房広報室「体力・スポーツに関する世論調査」(昭和60年) p.18

（7）同（6）　p.29～47

（8）Aの種目は，男子主導の集団スポーツ「ソフトボール」である。

（9）Bの種目は，女子主導の集団スポーツ「バレーボール」である。

(10) Cの種目は，男女混合の個人スポーツを特徴とした「バドミントン」,「卓球」と「テニス」である。

(11) 地域への帰属意識については，5つの質問がある。それが①外出してこの町に帰ってきた時に，「自分の町に帰ってきた」と感じてホットしますか②人からこの地域の悪口をいわれたら，何か自分の悪口をいわれたような気になりますか③この町の人たちはみんな仲間だという気がしますか④この町の人たちのまとまりは良いほうだと思いますか⑤あなたは事情が許せば，ずっとこの地域に住みたいと思いますかである。

(12) チームへの帰属意識については，5つの質問がある。それが①チームのためにはどんな用事でも引き受ける②チームリーダーの言うことには不満がない③チーム内にはチームワークを乱す人はいない④チームにはメンバー間のいざこざが原因で退部した人がいない⑤チームで地域の行事に参加することは大切であるという項目である。答えは，「はい」,「いいえ」,「わからない」である。

(13) 金埼良三「スポーツクラブの日常的活動を規定する要因の分析」(昭和56年九州大学健康科学紀要　p.87～95)

(14) 清水正典ら「地域スポーツクラブにおける多様化への構造」(1986年　日本体育学会37回大会号)
(15) 田中俊夫ら「地域スポーツクラブのチーム的特性についての調査研究」(1986年　日本体育学会37回大会号)
(16) 堺賢治「レクリェーションバレーボールにかんする研究」(1985年　日本体育学会36回大会号)
(17) 佐藤充宏「スポーツクラブの構造変動(生成・発展・崩壊)を支配する要因の分析」(1987年　日本体育学会38回大会号)
(18) 佐川哲也「地域スポーツクラブ会員の期待と充足に関する研究(1)」(1987年日本体育学会38回大会号)
(19) 金子守男「地域スポーツ集団の社会的機能に関する研究」(中京大学体育学研究科昭和61年度修士論文)
(20) 総理府統計局「社会生活基本調査報告(全国　生活行動編)」(昭和56年)
(21) T市教育委員会編「市民のスポーツに関するアンケート調査報告結果」(昭和60年)
(22) T市教育委員会編「T市の社会体育」(昭和62年)
(23) 福武直也「社会学辞典」,(1958年　有斐閣　P.189)
(25) 江橋慎四郎ら「社会体育実践」(昭和56年　第一法規)
(25) 杉山明子「社会調査の基本」(1986年朝倉書店)
(26) 大村平「統計解析のはなし」(1985年日科技連　P.252～259)